

西屋城の合戦④

宇喜多方の守る西屋城が、中村頼宗の指揮する毛利方の軍勢に包囲されたのは、おそらく天正九年（一五八一）の秋頃のことでしょう。

江戸時代後期に書かれた『美作古城記』から引用すると、西屋城の城兵は、毛利方を寄せ付けず堅く城を守っていましたが、西屋城主の斎藤近実は、このまま籠城が続けば兵糧が乏しくなり矢玉の尽きる前に餓死してしまうと判断し、城将の苦口宗十郎や難波孫左衛門らと協議して、近隣の田の稲を刈り取ることを計画します。

近実は、夜更けになると西屋城か



寄山城跡（養野）
西屋城の見張り場と伝えられる



寄山城跡付近から見た西屋城



養野尻付近の水田

ら兵を出し、近隣の田から刈り取った稲を城へ持ち帰らせていたのですが、これを毛利方に察知されてしまい、毛利方もこれに備えて夜番を置いて警戒を厳重にしていました。

そして九月八日の夜、城兵がいつものように夜更けに養野尻（井坂と養野の境付近）へ行き、稲を刈り取っていると、見張りをしていた毛利方の牧弥太郎という侍が手勢を率いて城兵を討とうと取り囲みます。城兵はこれを迎え討とうとせず、井坂村の宮の下の方へ逃げ出したので、弥太郎は先頭に立ってこれを追撃したのですが、城兵たちはこうした時

に備えて鉄砲を八挺用意しており、城兵方の原田兵衛という侍がタイミングを見計らって引き返し、鉄砲を立て続けに撃って反撃したところ、先頭にいた弥太郎が真っ先に射殺され、その他の兵士たちも次々と死傷しました。残る兵士は散り散りになつて味方の陣へ逃げ帰り、城兵たちは一人の死傷者もなく無事城に帰還し、近実は大いに喜び、田兵衛に恩賞を与えたということです。

さらに岩屋・葛下・枳形など周辺の主要な山城も毛利方が押さえていた状況下で、近実が小田草城のある野介庄や、さらにその南部にあたる薪郷（現在の郷地区）にある土地を与えられるほどの影響力があったのかと考えると微妙なところですが、むしろ、毛利を撃退した後の約束手形のようなものだと思えた方がよいのかもしれない。

この時、九月一〇日付けで近実が田兵衛に送った手紙も残されており、そこには、
このたび、飯坂（井坂）において牧弥太郎を討ち取ったことは、他に比べようがないほどの手柄である。この恩賞として野介庄のうちの鳥取久兵衛分と薪郷のうちの井上三郎左衛門分、久田村のうちの恒友名の土地を与える。これからも忠義を第一にして励むようにとあります。

この井坂の合戦では、ひとまず西屋城の宇喜多方に軍配が上がりましたが、中村頼宗はこの戦から十日も経たない九月一七日に配下の桜井久次郎に久田地頭分の領地一〇石を、九月二三日には久次郎の兄・桜井藤兵衛に大野の軽屋のうちに二〇貫の褒美を与える書状を出しています。これが何に対する恩賞なのかは書かれていませんが、時期的に考えて、前月号での広報で紹介した、藤兵衛が頼宗に持ちかけた内密の調略がこの頃に一定の成果を挙げたことが考えられます。

戦はいよいよ大詰めに近いといえます。

参考：『奥津町史』『鏡野町史』『鏡野郷土博物館講演録』『美作古城史』『美作古簡集註解』『岡山縣古文書集』『美作国の山城』

鏡野町教育委員会 生涯学習課 日下

電話（0868）54-7733